

図書館の帰り道 *Attempted Rape Revenge* by Ned



ミッシェルはデトロイトのティーンエージャー。友人は彼女を「シエル」と呼ぶ。赤毛のショートヘア、白い肌の持ち主だった。身長は一五五センチで体重は四五キロ。シエルは数年来、父の勧めでカラテを習っていた。ダウンタウンのませ餓鬼どもから身を守るためにだった。もつとも、あの夜まで、その成果を発揮する機会はなかったのだが。

ある夜遅く、シエルは町はずれの図書館で本を読みながら、年上らしい一人の少年が彼女を見つめているのに気づいた。彼女はしばらくして席を変えた。彼はすぐに彼女のほうに寄ってきた。閉館時間になると、彼の姿は消えていた。おそらく家に帰ったのだろう。シエルは図書館を出て、暗い夜道を急いだ。彼女は何度となく、誰かに尾けられている気配を感じた。彼女は神経を尖らせながら歩いた。突然、背後ではじけるような音がした。シエルは飛び上がり、踵をかえして音がした方を見た。そこには、灰色の猫がいた。心配しすぎかも、とシエルは思い、再び夜道を急いだ。

バス停には人っ子一人いなかった。冷たいベンチと小さな標識があるだけだった。シエルはベンチに座った。物音ひとつしない。このバス停は、人通りの少ない道にある。

暗がりから、さきほど図書館で見かけた少年が忍び寄ってきていた。シエルはそれに気づかな

かった。彼は黒いスウェットにTシャツといういでたちだった。テニスシューズを履いていたため、目的の場所まで辿りつくまでの間、足音がたつことはなかった。テイ・レイ（不良仲間を彼をそう呼ぶ）の日常は、ウェイトリフテイングと、彼の仲間たちに「戦績」——スラム街で恐喝をして金を集めたり、クラックを運んだり——についての自慢話をする事で費やされた。テイは二人の不良を射殺したことがあり、敵対する不良の女を二人レイプした経験を持っていた。彼の性質を一言でいえば「世間なんか糞くらえ！」であった。

テイはバス停の向かいにある建物の角を回ると、歩みを止めてさきほど図書館で見つけた獲物に見入った。彼の計画は単純なものだった。彼女に忍び寄り、彼女が何をしているか見える位置で腰をおろす。もし、彼女が立ち上がるまでに時間をかければ、それは彼女が「ほしがっている」ことを意味するのだ。

素早い動作で彼はベンチに歩み寄った。シェルが目あげたとき、すでに男は隣に座っていたのだ。彼女は、うさん臭そうに、神経質に左右に目をやった。テイは、彼女から数十センチしか離れていない。

シェルは立ち上がってこの場を去ろうか、と思った。「でも、どこへ行けばいい?」。迷った。

「もし、いまここを離れたら、バスに乗り損ねてしまう。どうすれば、変な目にあわずにすむかしら」「彼は何もしないかもしれない。そうであつたら、いい。明日になれば、つまらない出来

事として忘れてしまえる」。シェルが心を決める前に、テイが顔を寄せ、こう言った。

「ねえちゃん、今夜、暇なんだろう?」

シェルは黙って歩道に視線を落とした。こうなつたら、ここから逃げるしかない。テイは、彼女の腕をつかみ、大きな声で言った。

「おい、聞こえねえのか?」

シェルは彼を見て、首を振った。

「嘘だね、いいことしたいんだろ?」

彼女をつかんでいたテイの手が彼女の股間にすべりおりた。その手がシェルの股間を軽くつかんだ。シェルはびくりとし、その腕を押した。だが、彼の手はますます強く股間をつかんだ。痛みが走った。シェルは躊躇なく立ち上がり、男の手をジーンズから引き剥がした。男に向かって、

「自分でマスかいてろ!」

と怒鳴り、道路を横切つて向かいの建物のほうに歩きだした。テイはゆっくりと立ち上がり、女に近寄りながら言った。

「おい、ねえちゃん。ちょっと待てよ」

シェルは、そこでじっとしてないと、後悔するよ、と警告した。だがテイは無視して近寄ってくる。シェルは言った。

「来ないで、でないといひどい目に会わせるよ!」

シエルは身構えた。男が二メートルほど近寄ったとき、
「はいやあああ！」

シエルは叫んだ。同時に鋭い蹴りを相手のみぞおちに見舞った。

「うっ」

テイは呻き、体を前に折り曲げた。だが、すぐに体を起こし、シエルに襲いかかった。女の両腕をつかみ、そのか細い体を持ち上げ、ふり下ろした。彼女の股間がまともにテイの筋肉質の膝にぶつかった。彼は再び女を持ち上げ、膝の上に落とした。シエルは悲鳴を上げた。さらに持ち上げられたとき、シエルはわめいた。

「やめて、おねがい、やめて」

テイは容赦なくシエルの股間を膝に叩きつけ、そのまま女を抱いた。片足の膝の上にシエルをのつけたまま、片足でたつた。彼女の目に涙が溢れた。彼女の体重が、すでに傷ついた彼女のブツシーをますます痛めつけた。

シエルの体が固いセメントの上に投げ出された。だが、さきほどの状態であるよりはましだった。彼女は素早く頭をめぐらせ、相手につぶやいた。

「わかった。好きにして……」

タイはにやりとし、ジーンズを脱げ、と命じた。シエルは命じられるままにジーンズとパンテ

イを脱いだ。ブロンドの陰毛が陰唇にそって細い線を描いているのを眺めながら、テイはわめいた。
た。

「あのかっこうをしろ！……わかってるだろ、犬みてえに四つん這いになるんだ！」

シエルは言われたとおりに四つん這いになった。股間ごしに覗くと、タイは下半身を裸にしていた。テイのペニスは普通の大きさだったが、睾丸が異常に大きかった。男はシエルにまたがるように膝をつき、そっと命じた。

「俺のペニスを、穴まで導いてやってくれ」

シエルは自分の両脚の間から手を伸ばした。テイは、彼女が自分のペニスをつかみやすいように、少し後にさがった。シエルはペニスをつかみ、ブツシーに導いた。その鈴口が彼女の陰唇に触れた瞬間、彼女はさらに手をのばし、その睾丸をつかんだ。

シエルは爪を思い切り陰囊に突き立てた。テイが悲鳴をあげた。

「ぎやあああああ。は、はなせ、この雌犬！」

シエルはさらに力をこめた。テイの叫びが嘆願にかわり、やがて泣き声にかわった。男が、シエルがその睾丸に与えた苦痛のなかでひるんでいる隙に、彼女は素早く別の手で睾丸を持ち替え、彼のほうに向き直り、強く手で男の胸をついた。男はのけぞり、両手で体を支えた。

「よくも、大事なところを痛めつけてくれたよね。このけだもの」

シエルは、つかんだ肉塊をさらに強くしめつけた。

「どう？　どんな気分？……あら、さっきは元気よかったのにちぢこまっちゃったみたいじゃん。さあて、タマのほうはどうしようかなあ？」

シエルの爪が睾丸に食い込んでゆく度に、テイの目が涙で溢れた。陰嚢をゆすぶってやると、テイの頭が小刻みに震えた。

「た、頼む。悪気は無かったんだ……ぎゃあああ！」

テイの体を支えていた腕から力が抜けた。テイは仰向けに地面に倒れた。同時に、シエルは陰嚢から手を放した。男の両脚は大きく開かれ、その中央に皺だらけの陰嚢がぶらさがっていた。

シエルは、股間の痛みを思いながら言った。

「あんたが私にやったように……」

テイは女を見つめた。

「同じことをしてあげる」

シエルは右脚の膝を男の睾丸に叩きつけた。

「うげええええ！」

テイは悲鳴をあげた。夢中で女の膝をつかんだ。

「いい気持ちでしょ？」

シエルは叫び、すりつぶすように、男の腫れ上がった睾丸にこすりつけた。

「どう、まだ私としたい？」

シエルは微笑み、立ち上がった。テイは睾丸を両手で抑えて悶絶している。

「いい勉強になったでしょ？」

シエルがジーンズとパンティを拾うために屈んだとき、タイの片手がのび、シエルの陰毛をつかみ、ぐいと引つ張った。シエルは驚愕した。すでに傷つけられていたブツシーに新たな痛みが走った。シエルは仰向けに倒れた。ちょうどテイとシックス・ナインをするような恰好になった。シエルは必死に、再び男の睾丸をつかむために手を伸ばした。男はシエルのブツシーに指をつっこんで内部の襞をつかんだ。テイの指が乱暴にシエルのなかでうごめく度に、シエルは体を強ばらせ、呻き声をあげた。

シエルは夢中で左手で男の睾丸をつかみ、右手でそれにパンチを食わせた。テイの手がシエルのブツシーから離れた。その口から、やめてくれ、と声が漏れた。シエルはなおも右手を振り上げ、すでにやわらかくなっていた睾丸に叩きつけた。

ぐしゃっ！

男の股間から嫌な音が響いた。テイは、やめろ、と泣き叫んだ。だがシエルは容赦なく拳を男の睾丸に浴びせ続けた。五度目か六度目のパンチの後、テイは意識を失った。

シエルは手を止めて、粉々に砕かれた睾丸を左手でつかんだまま、彼女がいまやったことを見た。男の睾丸を潰したのは初めてのことだった。陰嚢のなかで、睾丸はぐちゃぐちゃになっていた。

るようだった。

シエルは微笑んだ。縮み上がったペニスの先端からわずかに精液が垂れていた。満足感が体じゆうに満たされてきた。左手の指でもう一度陰囊をつかんだ。その夜、彼女は一人の少年の男性としての能力を完全に奪い去った。シエルはしばらくぺちゃんこになった陰囊を弄び、その事実をことを確かめた。

服を身につけ終わったとき、バスがバス停に滑り込んだ。シエルは急いでバスに飛び乗った。バスは混んでいた。空いている席を見つけて座り、窓から外を見た。他の乗客のうちの多くが、彼女と同じものを見つけた。若い男が、破壊された生殖器をさらしていた。男の両脚の間にある哀れなそれがよく見えた。

バスに乗っていたほとんどの男達は、一人の女が微笑みながら見つめていた男の残骸が視界から消えるまで、彼らの生殖器を保護するように両脚を組んでいた。